

ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する 欧米と日本の文献の動向 - 2002年までの比較

村上 信

生活福祉学科非常勤講師

1. はじめに

医療や看護、福祉や介護、宗教社会学や精神世界、教育や生命倫理などのさまざまな学問分野や実践の領域で「スピリチュアリティ (spirituality)」あるいは「スピリチュアル (spiritual)」という言葉が使われはじめています。スピリチュアリティは従来は伝統的な宗教制度の中で体験されて語られてきた。キリスト教はその長い歴史の過程でスピリチュアリティと同義ではないがスピリット、霊という言葉を用いてきたし、日本的文脈では禅仏教者で、神秘主義思想家のスウェーデンボルグの紹介者でもある鈴木大拙が「靈性」について論じている (鈴木 1972)。

スピリチュアリティが重要な課題として論じられている領域はさまざまであるが、医療の領域ではかなり以前からこの問題が問われており、欧米ではチャプレン (病院付き牧師) がスピリチュアルケアの専門家と考えられてきた。スピリチュアルケアに関する議論の発端は、1967年、ロンドン郊外に現代的ホスピスの創設者として著名なシシリー・ソンドース (Cecily Saunders) が、聖クリストファーホスピスを設立し、末期患者の苦痛を、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルという四要素からなるトータル・ペインとしてとらえたことはよく知られている。わが国においてもスピリチュアルケアは、末期がんや HIV/AIDS 感染症の患者の緩和ケアにおける看取りと関連した実践的問題の一つとして取り組まれてきている。

一方、ソーシャルワークとスピリチュアリティについて見ると、ソーシャルワークは宗教的なスピリチュアル視座から著しい影響を受けながら発展してきている。ソーシャルワークの源流として、慈善組織協会運動とセツルメント運動の貢献が取り上げられるが、こうした運動は理想主義的な福音主義キリスト教徒たちによって担われてきたのである。しかし、1915年全米慈善・感化会議におけるアブラハム・フレックスナーによる「ソーシャルワークは専門職か」の基調講演を契機に、ソーシャルワークは「科学技術化」へと傾斜していくのである。これはソーシャルワークの世俗化といわれている。『新社会学辞典』の定義に従えば、世俗化とは「社会と文化の諸領域が宗教の制度や象徴の支配から離脱する過程である。」このような経過の中でソーシャルワー

クとスピリチュアリティの関連は十分な議論の対象にはならなくなった。しかし、1980年代後半以降、カンダ(Canda)やローエンバーグ(Loewenberg)らが、ソーシャルワークとスピリチュアリティの議論を活発に展開して、ソーシャルワーク領域におけるスピリチュアリティの議論が復活してきている。一方、わが国のソーシャルワークとスピリチュアリティに関する研究は初期段階にあり研究蓄積も乏しい。

本稿ではソーシャルワークの領域を中心に、北米のスピリチュアルに関する研究の動向を、文献を通して整理するとともにわが国の動向と比較することを通して報告し、今後のわが国のソーシャルワークとスピリチュアリティに関する研究の一助とすることを目的とする。

2. 方法

- (1) 欧米の文献の動向については、カンダ他ら(2003)がソーシャルワークとスピリチュアリティに関して、2002年7月までの間に英語で書かれた771の文献を検索して6つに分類して紹介し、研究の現状を概観しているため、その成果を活用した。771の文献が6つの分類領域にどのように分布しているかについて表1に整理した。次に文献を発表年代順に並べ替えて表2にまとめて検討を加えた。
- (2) 日本の文献の動向については、国立情報学研究所のKAKEN：科学研究費補助金データベースとCiNii(NII論文情報ナビゲータ)を使用して、文献に「スピリチュアリティ」または「スピリチュアル」を含むものを検索した。検索条件を文献全体として、「ソーシャルワーク」と「スピリチュアリティまたはスピリチュアル」の両方を含む文献を検索した。両方のデータベースで検索された結果は、ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する教科書と考えることができる研究図書(2003年出版)が1件、科学研究費の採択課題1件、論文1件であった。この結果からはソーシャルワークとスピリチュアリティに関する研究はまだ初期段階にあるように見える。しかし、文献のタイトルに「ソーシャルワーク」というキーワードを含まなくても、社会福祉の研究者やソーシャルワークの実践領域や関連領域でスピリチュアリティを研究した文献は少なくない。そこで、検索条件から「ソーシャルワーク」を外し、「スピリチュアリティ」または「スピリチュアル」を検索条件にすると、結果件数はKAKENで72件、CiNiiで737件であった(2007年10月現在)。KAKENで検索された研究課題はスピリチュアリティの研究動向を把握するにとどめて、CiNiiで検索された737件の中から2002年までに書かれた文献を選び出した。その上で社会福祉やソーシャルワークとスピリチュアリティまたは宗教に関連する文献と、このデータベースに含まれない文献も合わせて93件を通覧した。表2に邦文としてまとめて検討を加えた。
- (3) 欧米の文献の動向と日本の文献の動向を時系列に表示して図1、図2としてまとめて比較検討を加えた。

表1 ソーシャルワークとスピリチュアリティの研究分野

大分類	小分類	タイトル数
Religious and Nonsectarian Spiritual Perspectives 宗教的、非宗教的なスピリチュアル視座	Alternative Religions	9
	Buddhism	14
	Christianity	152
	Confucianism	6
	Deep Ecology and Ecological Philosophy	4
	Existentialism and Humanism	36
	Gandhian Social Activism	6
	Hinduism	8
	Islam	20
	Judaism	38
	Shamanism and Neo-Shamanism	5
	Spiritism, Santeria, and Curanderismo	9
	Taoism	4
	Transpersonalism	14
		325 (43%)
Cultural Perspectives and Issues Pertaining to Spirituality スピリチュアリティに関する文化的視座・問題	African American	29
	Asian and Asian American	20
	Hispanic, Latino/Latina	7
	Indigenous/First Nations	21
	Other Cultural Issues	13
		90 (12%)
Spirituality in Various Fields of Social work ソーシャルワークの様々な分野におけるスピリチュアリティ	Addictions and Recovery	15
	Aging	15
	Education	46
	Health and Physical Disability	22
	Loss and Death	28
	Mental Health, Psychotherapy, and Micro Practice	78
	Policy, Law, and Macro Practice	28
		232 (30%)
General Concepts, Concerns, and Approaches about Spirituality and Religion スピリチュアリティや宗教についての一般的概念、関係、方法		65 (9%)
Ethics, Values and Moral Issues 倫理、価値、道徳		48 (6%)
Social Work Textbooks Dedicated to Spiritual Diversity 教科書		11

(出典) Spiritual Diversity And Social Work より筆者が集計して作成

3. 結果

(1) 欧米の文献の動向

1) 欧米におけるソーシャルワークとスピリチュアリティの文献数

カンダ他ら(2003)がソーシャルワークとスピリチュアリティに関して、2002年7月までの間に英語で書かれた771の出版物を検索して6つに分類しているのので、その成果を活用してソーシャルワークとスピリチュアリティの研究の現状を概観すると表1の通りである。

宗教的なスピリチュアル視座と特定の宗教に限られない非宗教的なスピリチュアル視座に分類される論文・図書が325タイトル(43%)と最も多い。これには代替宗教や仏教・キリスト教のような伝統宗教、ディープエコロジー、実存主義とヒューマニズム、ガンジーの社会行動主義とスピリチュアリティに関する論文等が含まれる。次に多いのはソーシャルワークのさまざまな分野におけるスピリチュアリティに関する論文であり、232タイトル(30%)である。これには依存症の回復とスピリチュアリティ、高齢者とスピリチュアリティ、教育とスピリチュアリティ、喪失や死とスピリチュアリティ、メンタルヘルスやミクロのソーシャルワーク実践

とスピリチュアリティ、政策や法制およびマクロのソーシャルワークとスピリチュアリティなどに関する論文等が含まれる。文化的視座とスピリチュアリティの分類では、アフリカ系アメリカ人やアジア系アメリカ人、ヒスパニックやラテン系アメリカ人、北米先住民族やその他の文化的問題とスピリチュアリティについてソーシャルワークとの関連で論じたものが 90 タイトル (12%) である。その他には、スピリチュアリティと宗教一般に関する論文が 65 タイトル (9%)、倫理・価値・道徳問題とスピリチュアリティに関する論文の 48 タイトル (6%) が取り上げられている。以上の分類とは別に、スピリチュアリティの多様性を取り上げたソーシャルワークの教科書を 11 タイトル取り上げている。ソーシャルワークのミクロ、メゾ、マクロのさまざまな領域でスピリチュアリティの概念を用いた研究が試みられていることが分かる。

2) 年代別の欧米におけるソーシャルワークとスピリチュアリティの文献数

欧米の文献を年代別に概観すると表 2 の通りである。ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する欧米の文献は 1970 年代まではそれほど多くない。1970 年代では 46 件である。ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する代表的な研究者であるカンザス大学のカンダは、1920 年代から 1970 年代にかけて専門職養成が世俗化したと指摘しているが、このことが関連していると考えられる。すなわち、1915 年のアブラハム・フレックスナーによる「ソーシャルワークは専門職か」の基調講演を契機に、ソーシャルワークは「科学技術化」へと傾斜していき、ソーシャルワーク教育は世俗的な総合大学で行われるようになるのである。ソーシャルワーク教育審議会 (CSWE) カリキュラム方針ガイドラインの 1950 年代 (1953 年度) と 1960 年代 (1962 年度) の声明書においては、宗教についての内容が含まれているが、1970 年度と 1984 年度の声明書では宗教とスピリチュアルな問題への言及は削除されるのである。すなわち 1980 年代前半までは、ソーシャルワーク専門職はその宗教の起源から距離を置く傾向があったといえることができる。

① 1960 年代までの欧米の文献

この時期はキリスト教やユダヤ教に基づいた宗教とソーシャルワークに関する論文が少なくない。シャルロット・トール (Charlotte Towle) は 1945 年に著した『コモン・ヒューマン・ニーズ』の中で、スピリチュアリティについて定義はしていないが教会礼拝に参列するニーズや教会資源の利用、宗教的信念に対する尊敬、人生の目的を求めることの大切さ、倫理や価値について言及している。ジョンソンは『宗教とソーシャルワーク』(Johnson, 1956) を編集し、その中で、スウィフトが「教会と人間の福祉」(Swift, 1956)、ビッグハムが「牧師とソーシャルワーカーの協力」(Bigham, 1956)、その他について論じている。スペンサーは「宗教とソーシャルワーク」(Spencer, 1956) について *Social Work* 誌で論述しているが、これはソーシャルワーク実践が宗教について対応する方法について議論した最初の論文の一つであるとされる。また、「ケースワーク実践における宗教とスピリチュアルな価値」(Spencer, 1957) について *Social Casework* 誌で論述し、ケースワークに影響を及ぼすユダヤ・キリスト教の宗教の価値を議論するとともに、無宗派のクライアントのスピリチュアルな価値を擁護している。

表2 ソーシャルワークとスピリチュアリティの年代別論文数（欧米との比較）

			～1949年	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	～2002年	横計
宗教とスピリチュアリティ	代替宗教	英文					4	5		9
		仏教	英文			4	3	6	1	14
			邦文					2	2	4
	キリスト教	英文	2	9	7	7	57	55	15	152
		邦文							1	1
	儒教	英文						3	3	6
	深層生態学	英文							4	4
	実存主義	英文			6	4	10	16		36
	社会行動主義	英文					2	3	1	6
	ヒンズー教	英文			1	1	3	2	1	8
	イスラム教	英文			1			16	3	20
	ユダヤ教	英文				13	17	6	2	38
	シャーマン教	英文				2	3			5
	民間信仰	英文				3	4	2		9
	道 教	英文					2	2		4
超個人心理	英文			1		5	6	2	14	
文化とスピリチュアリティ	アフリカ系	英文					5	21	3	29
	アジア系	英文				1	5	10	3	19
		邦文						1		1
	ヒスパニック	英文				1	2	4		7
	先住民	英文					5	13	3	21
	他の文化	英文					3	9	1	13
ソーシャルワーク分野のスピリチュアリティ	依存症	英文				1	2	6	6	15
		邦文								
	加 齢	英文				1	6	5	3	15
		邦文					4	1	3	8
	教 育	英文	1		2	1	6	32	4	46
		邦文							4	4
	健康・障害	英文		1		1	7	9	4	22
		邦文				1	1	2	19	23
	喪失・死	英文					6	19	3	28
		邦文					1	16	5	22
ミクロ実践(メンタルヘルス等)	英文			1	2	11	47	17	78	
	邦文						2	5	7	
マクロ実践(政策・法など)	英文					7	15	6	28	
一般的な概念やアプローチ	一般的な概念	英文	2	3	2	2	17	34	6	66
		邦文							22	22
倫理・価値	倫理・価値	英文		1	1	2	26	16	2	48
		邦文							1	1
教科書	教科書	英文					1	7	3	11
縦 計	英文文献合計		5	14	22	46	219	369	96	771
	邦文文献合計		0	0	0	1	6	24	62	93
	文献総合計		5	14	22	47	225	393	158	864

② 1970年代の欧米の文献

この時期では、実存主義とソーシャルワークが注目される。クリル (Krill) は1966年に「実存主義：私たちの現在の革命の哲学」を、1966年に「実存的な精神療法とアノミーの問題」を発表し、ソーシャルワークの思想と実践への実存主義哲学の応用を論じている。そしてクリルは1978年に『実存主義ソーシャルワーク』(Krill, 1978)を著している。この本は、ソーシャルワークのために包括的な実存主義のフレームワークを提示する最初の本として知られている。クリルはその後にも多くの論文を著し、その中でスピリチュアルな視点もとらえている。今日のソーシャルワークとスピリチュアリティには、既存宗教のルーツに戻ることを要求する排他主義と布教活動に陥ることなく、人間の多様性を尊重する視座をとらえることが求められている。すなわち、ユダヤ・キリスト教といった既存の宗派の伝統を超えたスピリチュアル視座をソーシャルワークに生かすことが求められているが、この試みは1960年代後半のソーシャルワークの実存主義とヒューマニズムの登場とともに始まっている。その一方で、1970年代には臨床ソーシャルワークとユダヤ教に関する論文が多く見られる。すなわち、伝統宗教であるユダヤ教の律法の視点やユダヤ人の哲学と臨床ソーシャルワークを論じたものやユダヤの文化(シナゴグやユダヤ教の人々が共有する雰囲気やユダヤ人家族の価値など)の観点と臨床ソーシャルワークについて論じた論文が現れている。

③ 1980年代から2002年

1980年代以降はソーシャルワークにおけるスピリチュアリティの復興の時期である。表2にあるとおり、1980年代の論文数は1970年代の46件に比べて1980年代は219件、1990年代は369件、2000年代は2002年の7月までにすでに96件と急激に増加している。こうしたスピリチュアリティへの興味の復活の背景には公共政策、戦争、市民権、増加する宗教の多様性、宗教上保守的な政治運動の上昇およびニューエイジ大衆文化運動などの一般的な社会の動向に連動していると言われている。

1980年代よりカンダやローエンバーらが、ソーシャルワークとスピリチュアリティの議論を活発に展開している。そして1992年度ソーシャルワーク教育審議会(CSWE)カリキュラム方針ガイドラインでは、すべてのソーシャルワークプログラムが宗教についての内容を含むことを求めている、宗教とスピリチュアリティに敏感なソーシャルワーク実践が避けられないものになってきている。

1980年代の特徴は、どの宗派にも属さないスピリチュアリティの用語を定義する試みが行われていることを挙げることができる。1985年にサイポーリンは『臨床実践における現在のソーシャルワーク・パースペクティブ』(1985, Siporin)を著し、スピリチュアリティの定義を試みている。1987年にはジョーゼフが『臨床実践の宗教的なそしてスピリチュアルな側面：ソーシャルワークの無視された次元』(1987, Joseph)を著して、ソーシャルワークでスピリチュアルな次元が無視されてきたことに警鐘を鳴らすとともにスピリチュアリティを定義している。ここではカンダの定義を紹介する。

スピリチュアリティは、人間が人間であるための普遍的で根本的な局面に関係しており、意味や目的、そして自己や他者や究極的な実在（大自然、宇宙、内なる神、自己を超えた何ものか＝筆者が加筆）とつながりを得る道徳観の認識を探求することに関係している。この意味において、スピリチュアリティは宗教上の形式を通して表現されるかもしれないし、あるいは、宗教形式に依存しないで表現されるかもしれない。宗教はスピリチュアルなことをめざした信念、振る舞いおよび経験が制度化された形式であり、それはコミュニティによって共有され、伝統の中で長い時間をかけて伝えられたものである。（Canda & Furman, 1999）

カンダは宗教とスピリチュアリティの相違に関して、宗教がスピリチュアリティの表現や経験の手段として組織化され制度化された信条や社会的機能を含んでいるのに対して、スピリチュアリティは人間の基本的な本質及び意味、目的を見つけるプロセスに関係しているとしている。スピリチュアリティは基本的には個人的なものであり、宗教は本質的には社会的なものともみなしている。ある人にとってはスピリチュアリティと宗教は分かちがたく関連しており、また、別の人にとってはこの2つは別個のものであると述べている。

カンダはスピリチュアリティを人間の全体性あるいはゲシュタルト（精神や意識を単なる要素の総和に解消されない、個々の要素の総和以上のまとまった意味と構造をもち、それが維持されている形態）として概念化している（spirituality as wholeness of the person）。つまり、スピリチュアリティを人間の本質的なもので、減じることができない局面として捉えている（spirituality as essence）。彼は、また、スピリチュアリティを人間の経験や行為の一つの局面という、狭い意味でも定義している（spirituality as one dimension）。

1988年にローエンバーグはどの宗派にも属さない観点からスピリチュアリティに注目する最初のソーシャルワーク実践の教科書『Religion and social work practice in contemporary American society.』（1988, Loewenberg）を著している。

3) 年代別の文献内容の変化

文献の内容は年代毎に変化が見られる。1960年代まではスピリチュアルの用語は宗教という用語ほどには一般的には使用されていないようである。今日でもスピリチュアリティを定義することは困難とされているが、多くの研究者は、宗教よりも広い概念としてとらえ、人間存在の根源をなすものと関連し、生きる意味や目的、価値に関わるものとしている。そして、スピリチュアリティを特別の宗教のイメージの中に制限して用いることをしないという認識が共有されてきているが、どの宗派にも属さないスピリチュアリティを定義する試みは1970年代の後半から1980年代にかけて行われている。こうした背景には実存主義ソーシャルワークや人間主義ソーシャルワークの登場がある。スピリチュアリティは人間の多様性に敏感なソーシャルワーク専門職を養成する上で重要な領域として1990年代のソーシャルワーク教育審議会（CSWE）カリキュラム方針ガイドラインに宗教や信仰システムとともに取り上げられていくことになる。しかし、このことはソーシャルワークと宗教を否定することではないことに注意が

必要である。どの宗派にも属さない観点からスピリチュアリティが位置づけられることに加えて、一方では宗教に関連あるグループはソーシャルワークにおける宗教とスピリチュアリティの問題に大きな関心を寄せていることが、表2のキリスト教やイスラム教、ユダヤ教、その他の既存宗教の項目から理解できる。

しかし、「宗教や非宗教とスピリチュアリティ」に関する文献よりも、「ソーシャルワークの各分野とスピリチュアリティ」に関する文献が増加する傾向にある。特にメンタルヘルスや心理療法やミクロの実践とスピリチュアリティに関する文献が増加している。このことは、スピリチュアリティ視座を用いたソーシャルワーク実践が蓄積されてきていることを表していると考えられる。ホッジ(Hodge)は『スピリチュアルなジェノグラム：スピリチュアリティを評価するための世代間アプローチ』(2001, Hodge)や『スピリチュアル・アセスメント：スピリチュアリティ評価の質的手法と新しい枠組み』(2001, Hodge)を著し、近著ではスピリチュアル・アセスメントツールとして「スピリチュアル・ライフマップ」を提案している。

(2) 日本の文献の動向

1) 日本におけるソーシャルワークとスピリチュアリティの文献数

わが国で書かれたソーシャルワークとスピリチュアリティに関する文献を、国立情報学研究所のKAKEN：科学研究費補助金データベース、CiNii (NII 論文情報ナビゲータ) を使用して、資料全文に「スピリチュアリティ」または「スピリチュアル」の両方を含むものを検索した。

結果件数はKAKENでは、1993年以降2007年までに72件の文献が検索されたが(2007年10月現在)、特に看護学(24件)と宗教学(14件)の領域におけるスピリチュアリティ研究が多く採択されている。教育学(7件)や社会学(7件)、心理学(5件)や倫理学(5件)、社会福祉学(5件)の領域におけるスピリチュアリティ研究も採択されており、さまざまな学問分野や実践領域で「スピリチュアリティ」研究が進んでいることが伺える。また、2002年以降に5件の博士論文があり、スピリチュアリティが研究に値する課題として取り上げられるようになってきていることが伺える。

一方、CiNiiでは737件であった(2007年10月現在)。その中には文学研究におけるスピリチュアリティやジャズ音楽におけるスピリチュアリティのように、ソーシャルワークと直接には関連していない領域の文献も少数含まれているが、全体では看護学や宗教学の領域でスピリチュアルティの研究が進んでおり、1995年以降は増加傾向にあった。社会福祉学でも高齢者や緩和ケアの領域で研究が進んできている。これらの737件の文献の中から社会福祉やソーシャルワークとスピリチュアリティまたは宗教に関連する文献と、このデータベースに含まれない文献も合わせると93件であった。

2) 年代別の日本におけるソーシャルワークとスピリチュアリティの文献数

日本の文献を年代別に概観すると表2の通りである。ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する日本の文献は1970年代が1件、1980年代が6件、1990年代が24件、2000年か

ら2002年の3年間で62件である。1990年代まではそれほど多くない。こうした傾向はソーシャルワーク以外の分野でも同様の傾向である。すなわち、1970年代が1件、1980年代が1件、1990年代が49件、2000年から2002年が91件である。参考までに2000年から2007年までの8年間を集計すると686件であり、1990年代の49件と比較すると急激に増加していることが分かる。ただし、686件の内容をすべて確認することはできないので、この数字は全体の動向を把握する目的に限定して用いている。

日本においてスピリチュアルやスピリチュアリティが重要なテーマとして論じられてきた領域は、ターミナルケアやホスピスケアなどの死をめぐる領域である。ソーシャルワークにおいても緩和ケアやHIVソーシャルワークの領域でスピリチュアリティが論じられてきた。さらに高齢者の領域でも、当初は、欧米と同じようにスピリチュアリティと宗教の区別は曖昧であったが、何らかの宗教的な、あるいは霊的な支援の必要について論じられてきている。奈倉道隆は日本仏教社会福祉学会年報(1984)で『老人の終末への不安と仏教社会福祉』について論じているし、田宮仁は日本仏教社会福祉学会年報(1984)で『仏教と老人福祉—老人ホームにおけるターミナル・ケア』を論じて、その後の仏教ホスピス「ビハーラ」に繋がる議論を展開している。

しかし、日本においてスピリチュアリティが広く取り上げられるようになったのは、1990年代後半からである。その発端となったのはWHO(世界保健機構)の健康に関する議論である。WHOは、1946年にその憲章の中において「健康とは、単に病気がないとか、虚弱でないというだけではなく、身体的、精神的、そして社会的に完全に良好な状態をいう」と定義しているが、この健康の定義に「スピリチュアル」という視点を加えるという改正案が提言されたことである。1998年の執行理事会において「健康とは単に病気がないとか、虚弱でないというだけではなく、身体的、精神的、スピリチュアル、そして社会的に完全に良好なダイナミックな状態をいう」という改定案は、1999年の総会では実質的な審議にはいることなく事務局長預かりとなって、先送りとなっている(湯浅2003; 山口1998; 白井2000; 西平2001)。しかし、スピリチュアリティをあえて取り上げるに値する重要な課題であると国際機関であるWHOがみなしたことが、さまざまな学問分野や実践領域に大きな影響を与えて、2000年以降の文献が飛躍的に増加していると考えられる。

3) 文献内容の変化

日本におけるソーシャルワークとスピリチュアリティに関する研究は最近のことであるが、これまでに緩和ケア領域やHIVソーシャルワーク領域でのソーシャルワーカーによる実践的な報告や研究が蓄積されてきている。しかし、最近になってスピリチュアリティをめぐる新しい取り組みが行われているので、文献内容については2002年までにとらわれずに取り上げておく。村田(2002)は「福祉臨床においても、がんなどによって直接、死の恐怖にさらされることのない高齢者や障害者、あるいは健常者と呼ばれている青少年や壮年期の人々ですら生の無意味、アイデンティティ喪失、生の無価値などのスピリチュアルペインに苦しむことがある」ことを指摘している。そして「スピリチュアルペインの存在は医療分野に限らず、福祉臨床に

においても満ちあふれており、われわれが気づいていないだけである」との視点から、傾聴の技術を用いたスピリチュアルケアの学問的体系化をめざしている。さらに、木原(2006)は、虐待を受けた子どもがその深刻な事実を受け入れた上で、里親や養親と新しい親子関係を形成していく過程を支援するときには、心理的な支援という視点だけでは十分ではないことを指摘して、ナラティブ論と絶対者である神との関係性を介在させたスピリチュアルケアの視点を融合させた取り組みを報告している。これらは死にゆく人々に対する特殊な視点とみられがちであったスピリチュアルの概念を拡大していく可能性を示唆したものとして注目される。しかし、こうした取り組みは、少数の事例に基づく質的研究の段階にとどまっており、実践場面でも今後一層取り組みがなされることが期待される。

一方、ソーシャルワークや看護学の領域では、臨床的なアセスメントの必要性から多義的なスピリチュアリティの標準化を試みる研究も蓄積されてきている。WHO QOL 評価尺度の作成に関わった田崎らは、実証科学的な見地からスピリチュアリティを計量的にとらえるために厳密にコントロールした国際比較調査を行っている(田崎 2001;2006)。しかし、この厳密な調査のスピリチュアリティに関する概念構造が日本人のスピリチュアリティに即したものは断定しがたいとされて、逆にスピリチュアリティの多義性を浮き彫りにしたところは興味深い。ソーシャルワークの領域では、藤井(2000;2005)が、死にゆく人々や病む人々の QOL 研究のなかでトータルな QOL 評価尺度の開発を進めており、人間存在の領域としてスピリチュアリティの標準化を試みている。看護学の領域では、比嘉(2002;2006)が WHO 調査を参考に 15 項目 5 件法、5 項目文章完成法(半構造化面接法)からなるスピリチュアリティ評価尺度を開発している。

しかし、スピリチュアリティをアセスメントし、ケアに生かす取り組みの研究蓄積はまだその初期の段階にあるとすることができる。

(3) 欧米の文献と日本の文献の時系列比較

ソーシャルワークとスピリチュアルに関する欧米の文献と日本の文献を時系列に比較したものが図1と図2である。欧米の文献は1980年代後半から増加しているが、日本の文献は2000年から増加している。その内容を見ると、西洋の文献はソーシャルワークとスピリチュアリティについて「宗教的あるいは非宗教的な視座」で論じたものが40%近くを占めるのに対して、日本の文献は5%を占めるに過ぎない。しかし、これは日本特有の課題があると考えられる。それは宗教との関わりである。宗教とスピリチュアリティはカンダ他らの文献でも区別されるが、文献からは両者が密接に関連して使用されていることは明らかである。ところが戦後日本の教育では、戦時中の国家神道への反動から、宗教教育はむしろ公教育の場から意識的に排除されてきており、宗教軽視の風潮が一般には強い。日本に仏教が公式に伝来したのは538年のことであり、1400年が経過するが、日本人は無宗教であるという意見さえある。現在の日本の宗教が日本社会に対して、またソーシャルワークに対してもそれほど力がないことは自明のことであるが、宗教が日本人のものの見方に影響を与えていることを無視することも適切ではない。こうした事情が影響していると考えられる。

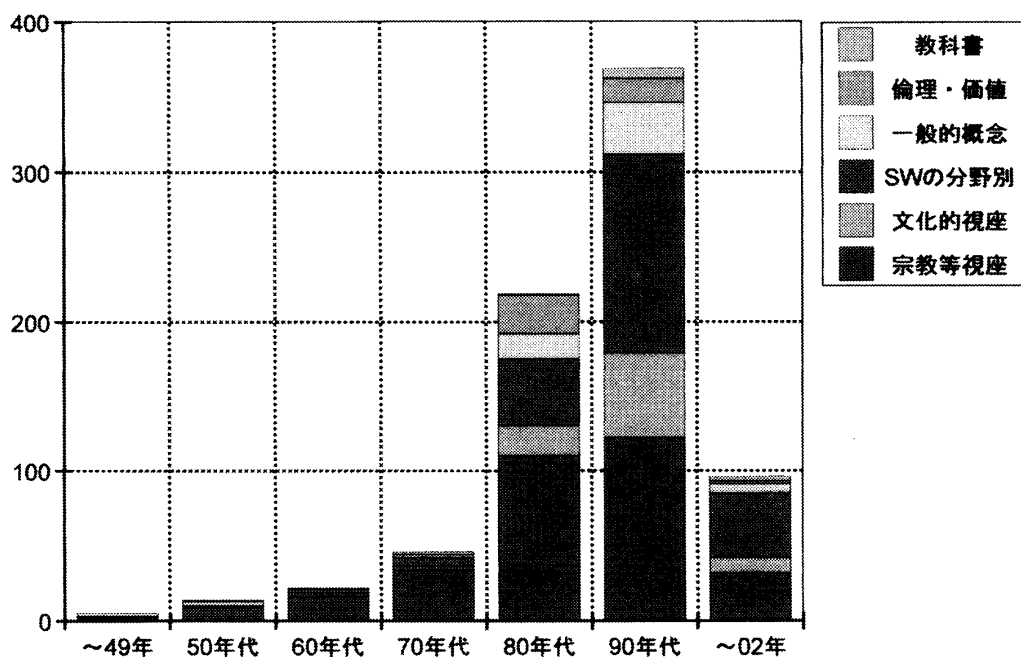


図1 ソーシャルワークとスピリチュアルの欧米文献(年代別件数)

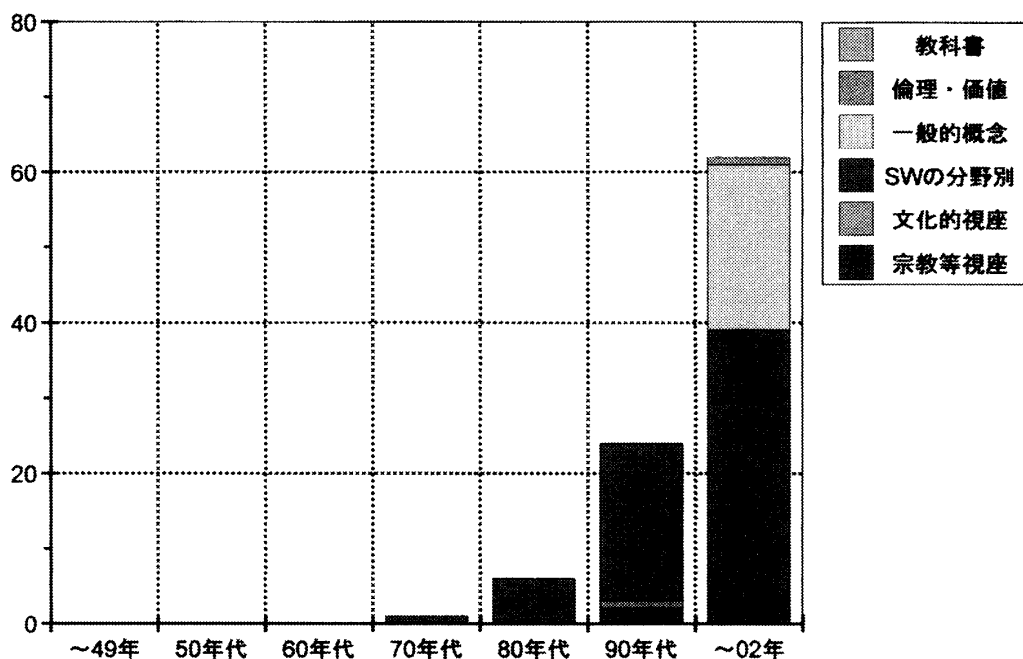


図2 ソーシャルワークとスピリチュアリティの邦文文献(年代別件数)

日本の文献ではソーシャルワークとスピリチュアリティについて「文化的視座」で論じたものがほとんど無いことも特徴的である。これについては単一民族の幻想に影響をされている可能性も否定できない。現実には文化的にも多様な人々が日本に暮らしていることを考えるとこれからは増加すると考えられる。

日本の文献ではソーシャルワークとスピリチュアリティに関する教科書は 2002 年までには 1 冊

もないが、木原活信 (2003) が著した『対人援助の福祉エートス』は教科書として認められる。

ソーシャルワークとスピリチュアリティについて「ソーシャルワークの分野別」で論じられている内容を比較すると、日本の文献ではソーシャルワークの「教育」とスピリチュアリティを論じたものが少ない。これは教育の中で宗教が位置づけられているあり方が異なっていることが理由であると考えられる。またソーシャルワークの「マクロ実践」の領域でスピリチュアリティを論じたものが日本の文献では全くない。スピリチュアリティがクライアント個人の問題にとどまっておき、全体と繋がっていくスピリチュアリティの側面が実践場面では具体的にとらえられていないのかもしれないが、社会のあり方自体に相違があるのかもしれないとも考えられる。スピリチュアリティをアセスメントする取り組みは日本の文献でも欧米の文献でも増加すると予想される。しかし、スピリチュアリティは宗教と密接に関連しており、人間生活における宗教の意味と役割を見過ごしたままで、援助の単なる一つの技術として、スピリチュアリティの一部を切り出してチェックリストを記入するような形で論じることは適切でない。鶴若・岡安 (2001) が「欧米の spiritual という概念を、ただ宗教性を排除した形で、わが国に取り入れれば良いという安易な議論は危険であろう」という指摘は首肯できる。スピリチュアリティは極めて多様な概念であり、人々のさまざまな宗教性や生きる意味や生きる価値などに関連した、わが国の文化や伝統、歴史の深層につながった幅広い概念である。その中でソーシャルワークとスピリチュアリティについて検討するべきではないかと考える。

4. おわりに

ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する欧米の文献と日本の文献の動向を比較した。スピリチュアリティとソーシャルワークに関する研究は、必要性があるにもかかわらず、科学性の対極にあるものとして避けられてきた。とはいえ、今日のソーシャルワークの動向においては、社会構成主義やポストモダンの思想の浸透により、受け入れられる素地ができた。つまり、合理的な科学理論や体系に対して微小な物語・ナラティブの尊重、人間の生における全体性の尊重など新しい価値と関係している。

しかし、スピリチュアリティはその用語自体が多義的であると同時に、その社会の文化・伝統・歴史・価値が染みこんでいる用語でもある。欧米のスピリチュアル概念の中から宗教性を排除したアセスメントシートを作成することで良しとする安易な対応は危険である。特に宗教はスピリチュアリティと別物とされているが、欧米の文献では両者は密接に関連している。日本の文献では宗教や非宗教との関連でスピリチュアリティを論じることが少ない。また、価値・倫理と関連して論じることもしない。スピリチュアリティを人間の本質的なもので、減じることができない局面「spirituality as essence」と捉えて、人間を「全体論的」(holistic)に理解するためには、宗教や価値・倫理との関連でスピリチュアリティを論じることの重要性を指摘しておきたい。そうしなければ、スピリチュアリティを論じているときでさえ、人間の大きな一側面、すなわちスピリチュアルな次元が見失われてしまうことがあると考えるからである。

参考文献

- 白井寛ほか (2000) 「WHO 憲章の健康定義が改正に至らなかった経緯」 『日本公衆衛生雑誌』 47-12.
- 木原活信 (2003) 『対人援助の福祉エートス』 ミネルヴァ書房
- 木原活信 (2006) 「被虐待児童への真実告知をめぐるスピリチュアルケアとナラティブ論ー『子供である』ことと『子供になる』ことをめぐってー」 『先端社会研究』 関西学院大学出版会, 24-48.
- 鈴木大拙 (1972) 『日本的靈性』 岩波文庫.
- 田崎美弥子・松田正己・中根允文 (2001) 「スピリチュアリティに関する質的調査の試みー健康および QOL の概念のからみの中で」 『日本醫事新報』 4036, 24-32.
- 田崎美弥子 (2006) 「健康の定義におけるスピリチュアリティ」 『医学の歩み』 216(2). 149-151.
- 西平直 (2001) 「WHO とスピリチュアリティー健康にかかわる事柄としてのスピリチュアリティ」 『UP』 30(7), 24-28.
- 比嘉勇人 (2002) 「Spirituality 評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討」 『日本看護科学会誌』 22(3), 29-38.
- 比嘉勇人 (2006) 「スピリチュアリティの評価法」 『医学の歩み』 216(2). 163-167.
- 藤井美和・李政元・田崎美弥子・松田正己・中根允文 (2005) 「日本人のスピリチュアリティの表すもの：WHO QOL のスピリチュアリティ予備調査から」 『日本社会精神医学会誌』 14(1), 3-17.
- 藤井美和 (2000) 「病む人のクオリティーオブライフとスピリチュアリティ」 『社会学部紀要』 (関西学院大学)
- 村田久行 (2002) 「福祉臨床でのスピリチュアルケア」 『月刊福祉』 85(12), 92-95.
- 森岡清美・塩原勉・本間康平 (1993) 『新社会学辞典』 有斐閣
- 山口昌哉 (1998) 「『靈性』ととりくみ始めた WHO」 『季刊仏教』 45, 190-198.
- 湯浅泰雄監修 『スピリチュアリティの現在ー宗教・倫理・心理の観点』 人文書院, 51-96.
- 鶴若麻里・岡安大仁 (2001) 「スピリチュアルケアに関する欧米文献の動向」 日本生命倫理学会 『生命倫理』 11(1), 91-96.
- Bigham, T. J. (1956). Cooperation between ministers and social workers. In F. E. Johnson (Ed.), Religion and social work (pp. 141-154). New York: Institute for Religious and Social Studies, Harper and Brothers.
- Edward R. Canda, & Leola Dyrud Furman, (1999). *Spiritual Diversity in Social Work Practice: the heart of helping*. THE FREE PRESS, 37.
- Edward R. Canda, Mitsuko Nakashima, Virginia L. Burgess, Robin Russel, Sharon Barfield. (2003). *Spiritual Diversity And Social Work: A Comprehensive Bibliography With Annotations* 2nd Edition. CSWE.

- Johnson, F. E. (1956). *Religion and social work*. New York: Institute for Religious and Social Studies, Harper and Brothers.
- Joseph, M. V. (1987). The religious and spiritual aspects of clinical practice: A neglected dimension of social work. *Social Thought*, 23(1), 12-23.
- Krill, D. F. (1978). *Existential social work*. New York: Free Press.
- Loewenberg, F. M. (1988). *Religion and social work practice in contemporary American society*. New York: Columbia University Press.
- Spencer, S. (1956). Religion and social work. *Social Work*, 1(3), 19-26.
- Spencer, S. W. (1957). Religious and spiritual values in social casework practice. *Social Casework*, 57, 519-526.
- Siporin, M. (1985). Current social work perspectives on clinical practice. *Clinical Social Work Journal*, 13(3), 198-217.
- Swift, A. L., Jr. (1956). The church and human welfare. In F. E. Johnson (Ed.), *Religion and social work* (pp. 1-15). New York: Institute for Religious and Social Studies. Harper and Brothers.
- Hodge, D. R. (2001). Spiritual genograms: A generational approach to assessing spirituality. *Families in Society*, 82(1), 35-48.
- Hodge, D. R. (2001). Spiritual assessment: A review of major qualitative methods and a new framework for assessing spirituality. *Social Work*, 46(3), 203-214.